さとやま

特定非営利活動法人うしく里山の会 広報誌 No.134

1.　表紙（アマドコロ）
2.3. 牛久市協働樹木リサーチ事業
（「上池親水公園」パンフレットの編集）
4.5. 親子農業体験講座事業（力を合わせて農業して食べよう。）
6. ハリギリの伐採（雑木林応援隊）
7. 主催行事「こども昆虫教室」活動報告（牛久自然観察の森指定管理者）
8. 牛久の外来植物調査事業
9. 身近な樹木 No37 イヌザクラ
10.11. お知らせ
12. 裏表紙　里山保全エコアップ活動の御案内

さとやま　2016年　春号（通巻134号）

■発行　特定非営利活動法人うしく里山の会
〒300−1236　茨城県牛久市田宮町808-20
tel 029-873-8552　fax029-873-8552
■写真：ヤブキリ（幼虫）

■事務局　牛久自然観察の森内
tel 029-874-6600　fax029-874-6812
http//ushiku-satoyama.org/
■編集　木谷昌史

牛久市協働樹木リサーチ事業

「上池親水公園」パンフレットの編集

一　はじめに

「南裏市民の森」「ひたち野みずべ公園」に続いて、27年度も牛久市協働樹木リサーチ事業を「上池親水公園」（以下・本公園）において、樹木（木本）及び野草（草本）の現況調査を実施するとともに、その結果を基にPR用のパンフレット（以下・パンフ）を作成しましたので、編集の考え方や留意点などについて説明します。なお、この調査の概要については、本誌133号（2016冬号）において渡辺泰プロジェクト責任者が報告されています。樹木や野草等についての調査データは、本報告をご参照ください。

二　編集の考え方

パンフの様式については、前2回と同様に使い勝手の良いA4版三つ折りとし、デザインや紙面の割付けは全て手作りで行い、印刷のみオンデマンド方式で外注しています。このことにより、製作費のダウンが可能となる一方で、プロとは一味違ったデザインに仕上がっています。タイトルに使用している地の色は、公園の自然を構成している四要素＝水・土壌・植物そして陽光を象徴する青・黄橙・緑・赤色を選んでいます。編集はこれまで同様に「分かりやすい、見やすい、美しい」デザインを基本としています。表紙から順に要点を説明します。

✻1面＝表面

縦三つ折り横型で上から表紙・現地案内・園内マップとなっています。

①先ず図1上段の「表紙」は、本公園の特色である池や湿地と、その周辺を囲む樹林や草地とが演出する春の風景を写真で示しています。写真の左右に子供達と夫婦連れの姿を動的に描き、誰もが楽しめる公園をアピールしています。タイトルの「せせらぎの里」は本公園の愛称で、中央入口の案内板に大きく記載され、その左手から西へ流れる小川を象徴しています。吹き出しの「森呼吸でリフレッシュ」は、当初からの共通キャッチフレーズです。

②中段の「ご案内」は、概要・交通・施設などを案内しています。市内からのルートは、国道408号から分岐線に入ると複雑ですので、グーグルの地図と航空写真をもとに手書きし、付帯する施設も明示しています。

③下段は「公園内案内図」です。案内板の写真をもとに、詳細かつ見やすくデザインしています。

図1：パンフレットの表面（上段・中段・下段）

✻2面＝裏面

横三つ折り縦型で右から左へ展開し、園内を歩く場合のガイド役となります。

①先ず図2右側は「観察のポイント」として、樹木・草花の分布特性、開花・紅葉などの季節変化など見所を説明しています。写真は、中央入口からの湿生植物園と散策デッキ（木製）、南側の樹林地を一望したものです。この下段から左へ、ⓐ植込み・花壇・草地、ⓑ湿地・小川・池、ⓒ林内・林縁・池畔と、植生により3区分し、各々の特性や野草や樹木の状況を紹介しています。その最初に人工色の強いⓐ植込み・花壇を簡単に紹介しています。

②これらの中で最大の見所は、中央ページⓑの湿地・池における、水上デッキや池周りからの湿生・水生植物の観察で、写真で例示しています。野鳥や昆虫などにも触れています。

③左側のページは、ⓒの湿地や池周辺の樹林地の植生を、高木層・低木層・草本層と階層構造の上位から写真とともに説明しています。小川の岸辺や池畔にはハンノキ、シダレヤナギ、カツラ、ヌマスギなどの湿潤地を好む高木が植栽され、独特な水辺林を観察できます。ヌマスギ（北米南東部原産）は、呼吸根を出し特異な生育をしていますが、スペースの制約から記述が出来ず心残りでした。なお、巨木に該当する樹木は見当たらず従前の様な単木での記載はありません。同様に高木・小高木の「樹種名一覧」についても、湿生・水生植物との関係で省略しています。

図2：パンフレットの裏面〈右側・中央・左側〉

三　終わりに

4月23日（土）には本公園を主体に市主催「新緑の樹木ガイド」が行われ、パンフの初舞台となります。参加の方々にパンフの真価が問われることになります。これから新緑の美しい季節です―本公園までは、牛久駅からほぼ4㎞で自動車で約15分、カッパ号も巡回しており、徒歩も可能です。皆様方もパンフを見ながら散策され、そのご感想をお聞かせいただければ幸いに存じます。調査結果を基にこのようなパンフを作成し、公園利用の普及に努めておられる市都市計画課に敬意を表します。

（羽賀正雄）

親子農業体験講座

力を合わせて農業して食べよう。

フキが顔を出し、ツクシが伸びをし、コブシが手を広げ、モクレンが大きく膨らみ、次々と春を知らせる草花が息吹きはじめ、今は畑にカエルが現れ、サクラが私達それぞれのスタートをお祝いしてくれています。

親子で力を合わせて農業して食べるまで体験しようと市広報に呼び掛けました。2年中断していて3年ぶりであることから参加者がいるか、また以前のスタッフ（メンバー）は出張や勤めていて忙しく、新たなスタッフ（メンバー）はいるのか心配でしたがアヤメ園管理業務に参加しているメンバーに相談したら、「手伝うよ」と言っていただき「親子農業体験講座」を始めることとしました。

畑に親しむ機会が少ない若い世代の親子、観察の森の畑を利用して種の植え付けから収穫、そして食するまでを体験する、一緒に働き、食育を考えるきっかけとする。畑に現れる動物たちをとおして自然とのかかわり、自然の豊かさを感じ学ぶ場とする。お父さんお母さんと子供たちで畑と周りにある自然を楽しんで沢山のことを感じてほしいと思っています。

5組15名の参加者、3歳から5年生まで8名、父母が7名そしておんぶされた同伴者2名、最初の日には元のスタッフも参加していただき、リピーターの参加者の子供の成長にうれしく、心強く始めることができました。

プログラムはジャガイモの植え付けから始まり蕎麦打ちで12月初めに終わるのが今までです。蕎麦は種まきから始まり、刈り取り、乾燥、実落し、唐箕かけ等々の工程があり負担を強いられることから残念だが今回は中止にすることとしました。新たなスタッフがスイカを作ろうと提案していただき、秋野菜にも挑戦することにしました。

棒を振り回す子、虫かごの中の生き物をジーッと見入っている子、しっかり手伝ってくれる子、畑の中を飛び回る子、畑や森の生き物たちには昼は休息の時間かもしれません、少しの喧騒が戻ってきたことは迷惑かもしれないが、いじめたりはしないから少しの時間を我慢してほしいと思います。

遠い昔に読んだ本に子供の時に「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないとの一節がありました、多くの方がご存知のことと思います、子たちにそしてお父さんお母さんにもいっぱいの感じることができたらと願う次第です。（飯田雅俊）

雑木林応援隊
「ハリギリの伐採」

梅林奥には我らの炭屋や畑があります。 畑は、畑隊、親子農業体験講座、一般使用の畑がありますが、通路脇に大きなハリギリがあり、落ち葉と日陰に悩まされてきました。昨年、この通路脇の低木を伐採し昔の道巾と思われる通路を再現しましたが、その時、改めて畑側より緑の保全区を見渡してみると、このハリギリの大きさから開園当初よりあったと思われるものの、まわりの木の種類より植林されたとは考えづらく、観察の森に許可を貰い伐採する事としました。幹は六十センチを超え、

樹高もかなり有りましたので、畑を使用しない冬季まで待ち、日を選んで伐採する事となりました。

伐採自体は、ハリギリが畑側に結構傾いていたので、そう難しいものでは無いと考えていました。

ワイヤーで引く事も必要なく畑側に倒れると思いましたが、問題は後処理で、玉切りと枝類の処理に時間が掛かると想定していました。通路が有るので、玉切りして通路を確保するのに時間がかかると来園者に迷惑を掛ける事になります。頭の中で十分に作業工程を確認して挑みました。 まず道具類のチェックと準備をして、安全確保のため、通路の遮断と作業員の配置を決めます。ヘルメットをかぶり、いざ伐採へ・・・。

伐採自体は、作業に一番慣れているベテランのIさんが実施あっけなく狙い通りの方向に倒れてくれます。やはり迫力満点の伐採でした。 ひとまず、伐採木を前に記念撮影、皆で群がるように玉切りを進めます。実は、この玉切りが一番危険かも知れません。大勢で進める作業では、玉切り中に重心が変わり、思わぬ怪我、事故に繋がる場合がありますので、急ぎながらも声かけながら慎重に進めました。通路確保のため、二M程の長さのまま数人で転がして炭屋横まで運びます。皆の顔が生き生きとしています。応援隊の原点はここにあるかも・・と思った瞬間でした。 大きな材と薪程度の材を片付け、枝類を当分使用しない畑に積んで作業は終了。安全作業に一安心し、当日の作業を終了しました。

後日、粉砕器で枝の処理をし、雨によるぬかるみ防止のため炭屋周辺に撒きました。ここで問題が浮上。まず、薪にしようと思っていましたが、ハリギリは燃えないのです。まるでナナカマドの様に燃えてくれません。今は炭にする事を考えていますが、どうなることやら。それと大きな材が数本程あるのですが、これをどうするか。一本の重量が、重い物で約五〇〇キロあり、運搬も大変です。製材して板材にする案も出ていますが、運搬と製材費用の問題があり、仮にうまく製材出来ても、引き取り手があるかどうか・・・？ どなたかのアドバイス通りに、炭屋にトーテムとして立てておこうかな？どなたかアイデアが有れば、御教示下さい。（雨宮廣之）

牛久自然観察の森指定管理者
主催行事「こども昆虫教室」活動報告

こども昆虫教室は、昆虫に興味や関心の高まる小学校低学年を主な対象として、今では希少になった里山環境に生息している昆虫達の素顔や不思議な生態を紹介しながら、親子で楽しく学んでもらうことを主な目的として開催しています。平成22年からスタートし今年で7年目。のべ1265名の親子が参加してくれました。

もっと昆虫に詳しくなりたい、採集方法や触り方を知りたい、保護者の方が苦手なので子どもにはぜひ親しんでほしい等、目的は様々です。

主な活動場所は園内の「バッタ原」と近くにある雑木林「コジュケイの林」。季節によって現れる昆虫の種類の変化や春に小さかったバッタ達が秋になり大きな成虫になって再び出会うことができる、時間の流れを感じられるよう一年を通じて同じ場所で開催するようにしています。

ここで季節ごとに見られる昆虫たちを簡単にご紹介します。

春はモンシロチョウやベニシジミ等の蝶類、ナナホシテントウを筆頭とするコガタルリハムシ、ツチハンミョウ等の甲虫類、また春にしか出てこないビロウドツリアブもおすすめです。夏はカミキリムシの仲間やナナフシの仲間、ヒグラシやアブラゼミなどのセミの仲間等々たくさんの昆虫たちが出てくる時期ですが、やはりカブトムシが大人気です。秋は鳴く虫達の季節となり、エンマコオロギやハラオカメコオロギ、クツワムシなどの日没とともに鳴く虫たちの大合唱が響き渡ります。冬は、コナラなど枝先で冬越しするイトトンボ「ホソミオツネントンボ」が見つかったり、天気の良い日だと越冬していたルリタテハが飛んでいたりと一年を通じて数多くの昆虫達と出会うことができるのも良好な里山環境が残されているおかげです。

イベントの内容は、観察や採集がメインですが、鳴く虫達の耳が前足にあるなどの雑学を入れながら参加者の方たちが興味を持てるよう、分かりやすくお話するように務めています。昆虫が苦手だった子が勇気を持ってさわった時の嬉しそうな顔や興味のなかった子が夢中で昆虫を追いかけている場面を見た時は嬉しくやりがいを感じる瞬間でもあります。

これからも子ども達が昆虫の楽しさや素晴らしさ、昆虫達が生息できる自然環境の大切さに気づけるよう。また、里山保全作業に従事してくださっている市民ボランティアの皆々様に感謝しながら、プログラム作りに切磋琢磨していきたいと思います。（蓮尾亮）

オオイヌノフグリの蜜を吸う「ビロドツリアブ」

平成28年度開始

牛久の外来植物調査事業

交易の国際的な進展に伴い、外来生物が渡来し、景観・生態系や産業への影響等が広がってきたことを背景に2005年、「外来生物法」が施行されました。植物の場合は外来種を帰化種とし、1868年（明治元年）に約20種だったものが、1950年には294種、2006年には雑種を含めると1336種に達し、近年急増しています。

外来種とは『岩波生物学辞典第5版』（2013）によれば、「過去あるいは現在の自然分布域以外に、意図的あるいは非意図的に導入された種、亜種、あるいはそれ以下の分類群。（中略）。新しい生育・生息地で、有性繁殖や無性的な増殖が可能になる過程を定着という。定着と同義で帰化という語が用いられてきたが、近年、保全生態学や保全の場において使用が避けられている。（以下略）」。以上のように外来種は、①人間によって持ち込まれ、②野生化している、③外来のものです。そして植物では普通、①有史以前に渡来したと考えられている①史前帰化植物、②有史時代初期に渡来した旧帰化植物、③江戸時代末期から現代までの新帰化植物に区分されています。本事業では③の区分で、外来植物の用語を用いることにします。

牛久市域では、これまでの観察で草本種子植物が650種ほど認められており、うち180種あまりが外来種です。そして外来生物法で「特定外来種」に認定されている種がアレチウリ・オオキンケイギク（写真）・オオフサモの3種、「要注意外来種」が40種ほどあります。木本はハリエンジュ（ニセアカシア）など数種に限られています。

本事業では、これらの牛久市域における実態をさらにはっきりさせるため、参加メンバー16名で調査グループを編成し、次のように進めます。平成28年4月から3年間、4～11月の第1・2日曜日と第3土曜日の午前、市内34町を回り、外来種の主な生育場所別に種類・発生の多少等を調べる計画です。その結果を基にして、景観・生態系管理や市民への広報・情報提供に役立てるため、事業3年目に『牛久の外来植物』の編集発行を目指します。（渡辺泰）

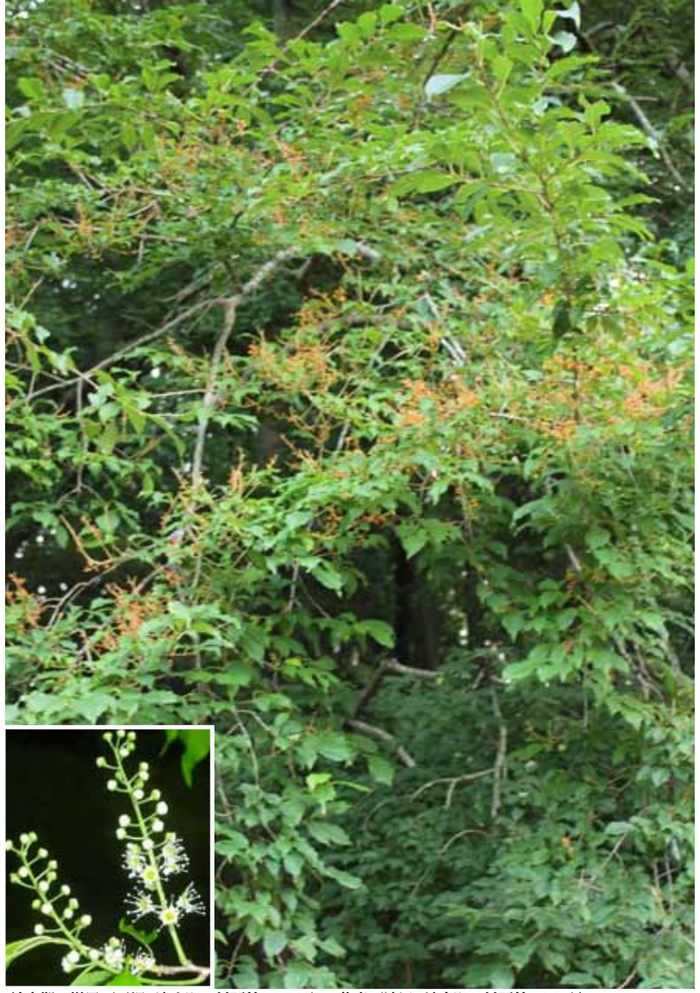
外来生物法で特定外来種に認定されているオオキンケイギク（ひたち野西 学園西大通り 14.5.30）

【記事の訂正のお知らせ】
さとやま133号 2頁 図1 右表 2行目に記載の「シナマンサク」は「アカバナマルバマンサク」の誤りでした。

身近な樹木

No.37

イヌザクラ（犬桜）



結実期の樹冠（戸塚 遠山町の斜面林 12.7.29）＜花序（渡辺 城中町の斜面林 12.5.1）＞

日本の国花サクラの仲間でありながら、いささか不遇な待遇をかこっている一群があります。それがイヌザクラ類です。名前からもやや軽蔑された感じが伺えます。バラ科サクラ属(Prunus)に分類されていますが、ウワミズザクラ属(Padus)としている本もあります。花の形が「桜」のイメージとかけ離れていることで話題となることがあります。

山地に生える落葉小高木で、高さは10mに達する。若枝は無毛。樹皮は暗灰色（別名のシロザクラはこれに因む）で光沢があり皮目が点在する。葉は互生し、縁に浅い鋸歯があり、葉身は長さ5～9cmで、狭長楕円形または長楕円形。花期は5月、葉より遅れて開く。前年枝の下方に写真のようなブラシ状の総状花序が数個互生し6～9cmになる。花序の下部には葉がない。その中にサクラの花に似た5～7mmの白い小形の5弁の花が多数咲く。果実は6～8月に熟して黄赤色から黒紫・黒色になる。近縁種のウワミズザクラとは総状花序の下部に葉があり／なしで区別できる。本州～九州に分布する。

牛久では斜面林・雑木林でよく見られます。探してみてはいかがですか。因みに植物図鑑を見ると和名索引でサクラという植物が見当たりません。ウメはあるのですが、サクラは「・・・・ザクラ」等の記載です。なにか不思議な感じです。（齊藤幸子）

【会員の皆様へ】

第 10 回通常総会開催のご案内

平成 28 年 5 月 20 日（金）9：00 から第 10 回通常総会を牛久自然観察の森ネイチャーセンターで開催いたします。大変お手数をかけいたしますが出欠確認用返信ハガキにて出欠のご連絡をお願いいたします。なお〆切は 5 月 14 日（土）とさせていただきます。

結束町みどりの保全区「エコアップ」作戦参加者募集

牛久自然観察の森に隣接する牛久市結束町の「みどりの保全区」の森林維持管理作業を行う「エコアップ作戦」では、地域の皆さんの協力のもと、下草刈りや除間伐、風倒木の処理等を行っています。活動には会員・一般問わず参加出来ます。皆様のご参加お待ちしています。

【活動日変更のお知らせ】
毎月第３日曜日におこなっていた活動日が第２日曜日に変わりました。第一金曜日の活動はこれまで通り行います。（５～７月までの活動日を下記に記載しております。どうぞご参照ください。）

■活動日時：５月８日（日）９：00～11：00　　13 日（金）９：00～11：00
　　６月３日（金）９：00～11：00　　12 日（日）９：00～11：00
　　７月１日（金）９：00～11：00　　10 日（日）９：00～11：00
■集合場所　牛久自然観察の森ネイチャーセンター１階倉庫前　　■予約　不要／荒天時は中止
■持ち物　　長靴　軍手　長袖　長ズボン　※刈払機・チェーンソー使用は資格所有者のみ
■問い合わせ先　０２９-８７４-６６００（担当木谷）

【お知らせ】

活動協力金のご支援

平成 27 年度（H28 年３月）、あいおいニッセイ同和損保 様から地域で活動する NPO として 253,150 円の寄付をいただきました。いただいた寄付金は里山保全作業や環境教育・自然体験イベントなどの活動費として活用させていただきます。